夜
一、講演　伊藤南州
一、活動寫眞映寫
以上

長以下重なる役員關係者等參列。佐波古神官によつて嚴肅なる工事竣工淸祓式を擧行した。

由な淺崎部長に申出て直ちに其快諾を得た事は、講員一同の大に感喜した事であつた。爾來數ヶ月間、諸氏は熱心なる練習を積みて本日こゝに館内の銅像前に、合唱する事になつたのである。こゝに

内郷村報の六大使命

一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。
二、村内公私各機關の活動狀況を報導し併せて其協調を計り、總親和總努力の實現を期す。
三、本村共濟事業の徹底を期す。
四、村内の善事美行を表彰し、且之を奬勵す。
五、本村と本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
六、餘力を以て、國民善導に當る。

本紙發行は大内一家の事業にして、其の社說は子孫に對する遺言を兼ぬるものなり。

毎月一回一日發行
本誌定價一部金五錢一ヶ年豫拔共金四十八錢
發行所　福島縣石城郡内郷村字宮下二　内郷村報社
編輯發行兼印刷人　右全所　振替仙臺八四二〇　大内民惠
印刷所　福島縣石城郡平町一丁目二九　株式會社平活版所

内郷村報　淺野翁頌德記念館號

純美なる勞資の結晶
淺野翁頌德記念館

大内民惠

回顧すれば十六年の昔となつた。記者が十余年の海外生活を終へて、東洋汽船會社の、其名も春洋丸の一船客となつて、大正七年春また淺き三月十二日、素絹のヴェールをまとふ富嶽に、久濶を叙して横濱に

故淺野翁

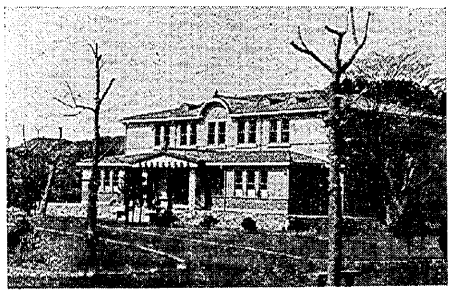
上陸、其社長であつた我淺野翁の、招待に應じて、他の一等船客たる内外の人士と共に、芝本邸待賓館紫雲閣の玄關に立つたのは、其日の一時頃と覺えて居る。

見れば、故翁、令夫人、初子嬢と並び立ちて、笑を滿面に湛へ、かはるゞ、記者に堅き握手をかはされ、翁は

「無事御歸朝、まことにお目出度う御座います。今日はようこそお出下さつた」

令夫人は

「あなたは我國の方なのだから、今日は外國の方達の御接待も、よろしくお


淺野翁頌德記念館全景

願ひいたしますよ」

と、いとも如才なく、打ちとけての仰せ、一見舊知の如しといふが、一揖よく老父母に、迎へらるゝ樣な感に打たれ、先つ案内をうけて閣の内外を見るに、日本の粹と美とを蒐めたる、結構の莊麗、裝飾の典雅、流石は我國紹介の目的に適へるを喜び、且驚き、同行の人に對しても、大に鼻を高うするを得、かくて半日の間、到らざるなき歡待をうけ、夕刻退邸したのであつた。之れ記者が、翁を知つた最初なのである。其後六年を經て、大正十二年陽春四月、ゆくりなくも翁が社長たる此磐炭に、獨身

館内のホール　正面に安置せるは翁の銅像

外人に對して、大に鼻を高うするを得、かくて半日の間、到らざるなき歡待をうけ、夕刻退邸したのであつた。之れ記者が、翁を知つた最初なのである。其後六年を經て、大正十二年陽春四月、ゆくりなくも翁が社長たる此磐炭に、獨身

七年會を創立して、從業員をお預りする事となり、こゝに翁の慈顏に接す[redacted]機會屢々にして、又其恩顧を蒙る事も、愈々深きを加へたのである。翁が現場に、將た會合に、其矍鑠たる巨軀をゆるがしつゝ白髮童顏、黑き長き眉をうごかしつゝ、恰も

現淺野社長

愛兒に物言ふが如くに、稼ぐに追ひつく貧乏なしを、總親和、總努力を、諄々と說きまはり、之を仰ぎ、之を聞く幾千の從業員は、何れも父と親しみ、親方と慕ひ、粉骨碎身、各自の

前川專務

慈職責を全うせんとする氣分が、全山に漲るを見るに及んでは、又一段と感激の情を深うしたのであつた。然して翁が、昭和五年の盛夏、病床の人となり、其重態を傳ふるや、三千七百九十余人の從業員が、期せずして、一致醵金して羽蒲團を作り、熱誠をこめて一々署名したる一大簿冊を綴り九月十三日代表を送つて、此見舞品を、親しく翁に呈したのであつた。贈くる者受くる者、たゝ感激の

涙あるのみであつた。越えて十一月九日、天壽全く盡き、八十三歳を一期として、終に永眠せらるゝや、全山は愁雲を以て蔽はれ、葬儀當日には、本邸に代表を派し、山元にては式を擧げて、其英魂を弔ひ、こゝに全く、父翁と永久の訣別を告ぐるに到つたのであつた。されど故翁追

故翁曾孫倉田洋子嬢　銅像除幕者

慕の念は、轉た凱切を加へ、全從業員の代表機關たる、聯合役付會は、こゝに亦期せずして一致、何等かの形によつて、感謝追憶の微衷を致し、故翁を永遠に記念せざるべからずと此會の主宰者たる、當時の勞務課長、現事務部長濱崎善三郎氏に、其切々の

（以下二面へつづく）

詠歌を合唱する事になつて居つて一意專念曇りなき明鏡の如き心境にあつて、之を詠唱する處に信仰の要諦があるといつて、今や全國を風靡しつゝある狀態なのである

（以下一面よりつづく）

情を訴へたのであつた。人情課長の稱あつた同氏、何條之に異論あるべき茲に感激阿吽の呼吸合致して、會合を重ぬる事四回、菅原所長以下三百六十余名の役員、亦其熱誠に動かされ、進んで之が賛助者となり、別項掲載の如き、資金募集趣意書となつて現はれたのである。之を聞いた渡邊前川專務をはじめ重役の全員、之を傳へた全國各地の人士も、共に其至情を感嘆奮つて此擧を賛し、別項濱崎部長が記述せられた如き、經過順序を經て、純なる勞資の結晶、美なる人情の極致を、如實に物語る我**頌**

菅原所長

濱崎事務部長

德記念館は、綴驛頭に巍然として、聳立するに到り、本日の吉辰を卜して、其開館式を擧ぐる事になつたのである。

記者も亦其席末を汚す光榮を得、衷心より祝意を表するものである。嗚呼頌

工事監督者
佐々木建樂係主任

德記念館！　實業界の耆宿武藤山治翁は、之に達筆を揮つて、共存共榮の一大扁額を寄せらる。宜なる哉言や、四字よく既往を語り、將來を敎ふ。

全山の從業員諸君も、全村の人々も、此館の由來を、深く念頭に銘記して普く之を善用し、故翁の偉德を頌表し、遺訓を遵奉すると共に、我父翁の比ひ稀なる福壽にも肖かられん事を、切望に堪へない次第である。記者は

翁に親炙してよりこゝに十有六年、今日此館を仰いで、眞に感慨無量、禿筆を呵して、感想の片鱗を叙し、以て[illegible]となす。

淺野令夫人

ありし日の
眞心うつす
ひもかがみ
君しのばれん
長き世かけて

德積歌子

淺野翁頌德記念館
建設の由來及經過報告

磐炭礦業所事務部長　濱崎善三郎

前社長淺野翁が大[illegible]業家であり大努力家、大奮闘家であられた外に、私共が最も心を打たれたことは一般從業員女子供の末に至るまで、慈顏愛語を以て心の底から愛撫されたことであります。

社長が斯樣な次第であるから從業員も社長を慈父とも仰ぎ、親方ともなつかしんだのであつてその御愛情の程は、從業員の心根に深く徹し全く主從水魚とも申すべきであつたのであります。

翁が昭和五年九月歐洲旅行から歸朝せられて後、御病氣に罹られ、御重態といふ報が傳へらるゝや、之は何を措いても御見舞をせなければならぬといふことになり、たつた五日の間に三千七百九十三人の從業員から、百五十圓餘の醵金をし、その月十三日代表者五人が三越の羽根蒲團を持參して御見舞に參つたのでありますが、

社長には、山から勞働者が見舞に來たと知らるゝや、御重態にも不拘、病床に引見せられ、感謝と激勵の言葉を與へられました。その時の報告書は御讀みになつた方も御座いませうが、爾來全山の從業員は社長の御平癒の一日も速かならむ事を祈念してゐたにも不拘、五年十一月九日遂に逝くならるゝや、全山驚愕、礦業所に於ては直に主任會議となり、十一日には鑛夫役付聯合會が開催されました。其役付聯合會席上で全山から香奠を募つて、御靈前に差上げ御葬式には代表者を途つて參列燒香することを一應決議したのでありますが、其内に又發議するものがあつて香奠を差上ぐることもよいが、御葬式の日取は十三日であつて見れば、それまでに全山から香奠を集めることはなか〳〵むづかしい、御葬式が濟んでしまつてから御香奠を上げることも變だし又金に困る樣な方でもないのであるから、いつそのこと社長の德を永久に忘れぬ樣に、記念碑でも建てゝはどうかといふものがありました。處がなみをる全員立ちどころになるほどそれがよい、と之に賛成致しまして、大体此の附近の山から自然石の大きなものを運搬して來て礦業地適當の場所に碑を建てやう、それにしても相當の經費が要るから金を集めることにしたいといふことになつたのであります。それからその席上で

十一月十三日の御葬式の日山元では、高坂グラウンドに於て、英靈告別式を營むこと、供物として餅をつき、參列燒香者にも分けてやることになつてゐることを發表した處が、役付一同は是非自分たちに餅つきの奉仕をさして呉れ、餅は故人の遺訓である努力をそのまゝ、努力餅と命名し、東京御本邸の故翁の靈前にも供へ度いといふことを決議したのであります。此の靈前に供へる餅は大内七年會長に持參を願ひ、首尾よく御供へすることが出來ました。同氏の報告記事中の一節に

「私は努力餅を供へる役目を御[illegible]つたので、之を携へ前日に上京、既に職員代表として先發滯京中の菅原所長水野部長に會見、其奉供方の手配を御願したのであつたが、既に靈前は各宮樣方をはじめ全國知名の士よりの供物によつて占領せられ殆んど寸隙もなき有樣であつたが前川專務が四千人の從業員の誠意を諒として極力葬儀委員に交渉の結果、當日午前九時漸く其の目的を達した」

とあります。

十一月十三日御葬式當日は高坂グラウンドに於て祭壇をこしらへ、社長の大寫眞を正面にかざり、午後二時告別式を營みました

當日は隨分ひどい風の日であつたにかゝはらず、式に參列する者數千に上り式が終へて後も燒香者陸續として參り、現場歸りの作業服のまゝの者あり、御父さんが子供の手を引いて來るもあり、お母さんが小さい子をねんねこでおんぶして來るもあり、社外の人も隨分澤山見えられ、老若男女當日の參詣者は大体數へたのでありますが、五千數百名に上つた樣な次第で、午後五時過ぎ秋の日も暮れむとする頃漸く參詣者の足も遠のき祭壇を撤去することが出來た樣な次第であります。

記念事業の件に付ては、十一日の役付聯合會後直に私から礦業所長に報告致しました處、所長も非常に喜ばれ何れ主任會議を開いて職員も發起人か賛助員になることにし度いといふことでありました。役付聯合會は最初が前申しました十一月十一日、それから二十三日、三十日、十二月七日の四回に渉り愼重審議を重ねまして、當時の鑛夫役付百七十八名が發起人となり、礦業所長外三百六十三

（以下三面へつづく）

（二面よりつづき）

名の職員が賛助員となつて趣意書を作り寄附募集に取り掛つたのでありますが、特に私共が嬉しく思ひましたことは、社外の有志の方に御快諾されたのであります。

巖谷小波先生の額は、當地に講演に參られた節に御願いたしました此等の立派な尊い御揮毫を掲ぐることが出來ましたことも是偏に故[illegible]氏に御願致し[illegible]て、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の賛同枚擧に遑あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

行き詰れる現代の教育制度を解體し

教育制度改革概論

矢野恒太序　大内民惠著
服部宇之吉

（四六版二一一頁　定價五十錢　郵税六錢）

我國教育學界の權威

京大總長小西重直博士

書を寄せて曰く、多年ノ御體驗ト實地ノ御試練ニ基ク眞摯憂國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思議感激ニ打タレ申候云々。

界の大家前田[illegible]建家は入札の結果小川組吉川久太郎氏が引受け、建具は東京の相川已之吉氏が一切納められ、其他器具調度裝飾電燈裝置等を納められ[illegible]督に當つた建築係の佐々木主任以下係員諸氏の長い間の苦勞といふものは並々ならぬものがあり、會社の他の直接の事業が又非常に忙い傍ら、此の記念館の建、かやうに堂々たる立派な故翁を偲ぶにふさわしい記念館の建設完成を見るに至つた所以のものは、畢竟故翁の德が如何に人心に食ひ入つてゐるかの證據でありまして

發行所　日本評論社　東京丸ノ内昭和ビル
取次所　内郷村報社

（二面よりつづき）

名の職員が贊助員となつて趣意書を作り寄附募集に取り掛つたのでありますが、特に私共が嬉しく思ひましたことは、社外の有志の方々がそんな企てがあるならば是非自分達にも應分の寄附をさして呉れといふ、熱烈な御聲援御援助のあつたことであります。今日迄の寄附金額は左の通りになつて居ります。

磐城炭勞働者、四、一六七名、二、一二四圓二五錢。全職員其他、四九二名、一、〇九三圓三〇錢。社外有志、八五八名、二、五五〇圓七四錢。元磐炭會、一、六五〇圓。本社職員、二二名、一〇五圓三六錢。重役、一二名、一、七〇〇圓。預金利子、六一圓一四錢

總計金九二八四圓七九錢

（御芳名は製本致して永久に此の館内に保存致す次第であります）

重役及礦業所長に於ては故翁の德を慕ふ勞働者の純情から出發したことが斯くまで熱があり、世間の御聲援があつたことを非常に喜ばれまして、是丈の金が集まつた以上は記念碑でなく、翁の德を偲ぶに最もふさわしい、そしてもつと有意義なものをこしらへたい、それにしても不況の折柄ではあるが、會社からも寄附金總額と同額位の金を出すことにして、故翁頌德の記念館を建てることにしたいといふことに決したのであります。之を建てる土地は此の場所（礦業所傍）が最も適當だといふ事になりましたが此の敷地には住宅があり、その附近に多數の土地所有者がありましたが、快く讓つていただき、此の立派な土地を得たことは望外の幸でありました。それから此の記念館の設計は前川專務の御計らひで、東京に於ける斯界の大家前田健氏に御願致し建家は入札の結果小川組吉川久太郎氏が引受け、建具は東京の相川巳之吉氏が一切納められ、其他器具調度裝飾電燈裝置等を納められた人々も、克く此の記念館設立の趣意を諒解せられて、商賣氣をはなれ終始美しい清い御精神でやつていただいたことは感謝に堪へない次第であります。

設計の出來ましたのが六年の九月、七年七月に此の土地の埋立及基礎工事が完成致し、昨年九月四日上棟式を擧行致しました。最初計畫してから今日迄二ケ年半の年月がかゝつたわけでありますが經費の點はまだはつきり清算濟に至りませんが大体二萬四千圓と見れば大差なからうかと考へます。その經費の大略を申述べますと、

土地買收及舊家屋移轉費、九一〇圓三〇錢。地盛及基礎工事費三、〇四一圓三五錢。建築請負金一〇、六九〇圓。電燈設備費、一、一二二圓一六錢。建具代金、一、〇九七圓六七錢。家具調度裝飾庭園設備其他諸雜費、七、一三八圓五二錢（大体の見込）

總計金二四、〇〇〇圓

かやうになつてをります。

それから此の館内に掲げてあります額でありますが、總持寺管長秋野孝道老師、樞密顧問官元田肇閣下、南天棒老師、前鐘紡社長現時事新報社長武藤山治先生の御揮毫は、記念館を建てることに決定してから、私は記念館には是非それにふさわしい名士の御揮毫がほしいと思ひまして、昭和六年の頃より社用で上京しました時、寸暇を得ました折に、是等諸名士を訪問致し、故翁の御慈愛の事から、鑛夫諸君の純情等其他を細かに御話申上げると、どの方も即座に御快諾されたのであります。

巖谷小波先生の額は、當地に講演に參られた節に御願いたしました此等の立派な尊い御揮毫を掲ぐることが出來ましたことも是偏に故翁の德と從業員の熱の然らしむる所であります。それから是は社内の事で、こゝで申述ぶることは如何と思ひますが、敷地の埋立から基礎工事、記念館建設等あらゆる工事に當つた建築係の佐々木主任以下係員諸氏の長い間の苦勞といふものは並々ならぬものがあり、會社の他の直接の事業が又非常に忙い傍ら、此の記念館の建設完成に心血を傾倒されたのは涙ぐましい位で、深くその勞を多としなければならぬと思ひます。

最初香典の代りに記念碑でもといふ計畫から出發したものが、かやうに堂々たる立派な故翁を偲ぶにふさわしい記念館の建設完成を見るに至つた所以のものは、畢竟故翁の德が如何に人心に食ひ入つてゐるかの證據でありまして今更故人を追慕する情轉、切なるものがあります。

故翁も定めて地下で喜んでゐて下さる事と信ずるのであります、是を以て御報告と致します。

【斯の如くにして我頌德記念館の建設は企てられたのである】

故淺野社長　遺德記念事業建設資金募集趣意書

◎白髮童顏、努力の結晶とも言ふべき我が淺野社長逝かれてより早や夢の如く一ケ月を經過致しました。

◎翁が事業界の偉人として國家に盡されたる勳功の程は申す迄もありませんが我が磐城炭礦に於ては明治十六年小野田礦草わけをしましてより今日に至るまで長年月の間社長として事業の隆盛に盡力せられ私共從業員に對しては上下の隔てなく何時もにこやかに慈顏愛語を以て呼びかけられ殊に近年は八十以上の御老體を以て從業員を勵まさんがため日曜を利用せられ遙々來山されました私共が愛と汗を旗じるしに仕事にいそしんで居るのも是皆故社長の高大なる御恩德に寄ること多いのであります。

◎私共は今後故社長の遺訓を守り全山の從業員が一層心を協せ事業に精進する覺悟でありますが此際故社長の御遺德を永久に記念すべき事業を起し聊か報恩の誠を表はしたいと思ひまして私共發起人一同は去る十一月十一日二十三日三十日十二月十七日の四回に渉り會議を開き愼重審議を重ね尙會社幹部の方々の御贊成御諒解をも得て左の通り決定したのであります。

◎何卒私共の此の趣意に御贊成下さいまして應分の御寄附を御願する次第であります。

一、寄附金拾錢以上

二、記念事業は鑛業地内適當の個所に記念碑銅像又は記念館等の如きを建設したい念願であります、凡ては寄附金の總額如何により會社幹部の方々と協議の上右の内一つを選ぶことに致し升

三、之より三ケ月以内に寄附金募集を締切り御一周忌迄に記念事業の建設を完成致したいと存じ升

四、御寄附金は一家何人でも差支へありません

五、尙從業員の方々に就ては御銘々の給料又は稼賃金より一回又は數回に亘り控除していただき升會社の從業員の方々許りでなく直接間接會社に關係ある方々又は故淺野社長の御恩德を敬慕する方々よりの御寄附をも喜んでいただきます

六、寄附金は凡て磐城炭礦會計課に預け入れます

七、現金御納付の場合は受領書を差上げます

八、御寄附者の氏名及金額は大内民惠氏發行の内郷村報に掲載していただきます

九、記念事業完成の上は收入支出の明細書を差上げます

十、御寄附者は必らず寄附芳名簿に御署名を願ひます　芳名簿は一冊に製本の上永久に保存致し升

昭和五年十二月十日

磐城炭礦株式會社礦業所

發起人

昭和五年度鑛夫社宅世話役　丹治芳兵衛外六十二名

昭和六年度鑛夫社宅世話役　國安哲也外六十二名

（昭和五年十二月一日就任）

礦夫組　長五十嵐政吉外十二名

職工協濟會幹部　高橋善八外十二名

磐城炭礦青年會幹部　圓谷清外九名

修養團磐城炭礦支部幹部　大内民惠外二十二名

贊助員　磐城炭礦株式會社礦業所職員　菅原萬治郎外三百六十三名

矢野恒太
服部宇之吉　序　大内民惠　著

教育制度改革概論

（四六版二一一頁　定價五十錢　郵税六錢）

我國教育學界の權威
京大總長小西重直博士
書を寄せて曰く、多年ノ御體驗ト實地ノ御試練ニ基ク眞摯憂國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思感激ニ打タレ申候云々。

發行所　日本評論社
東京丸ノ内昭和ビル
取次所　内郷村報社

頌德記念館は、綴驛頭に巍然として、聳立するに到り、本日の吉辰をトして、其開館式を擧ぐる事に

翁は齡十有六年、今日此館を仰いで、眞に感慨無量、禿筆を呵して、感想の片鱗を叙し、以て祝辭となす。

行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理と實際と、歷史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の贊同枚擧に遑あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

年會長に持參を願ひ、首尾よく御供へすることが出來ました。同氏の報告記事中の一節に

「私は努力餅を供へる役目を仰せつかつたので、之を携へ前日

十三日、三十日、十二月七日の四回に渉り愼重審議を重ねまして、當時の鑛夫役付百七十八名が發起人となり、礦業所長外三百六十三

（以下三面へつづく）

開館式次第

昭和八年五月七日
午前九時開始
司式者　猪狩喜平治

一、職員及鑛夫代表入場
一、來賓入場
一、開式ノ辭　菅原所長
一、國歌合唱　一同起立
一、故翁銅像除幕倉田洋子
一、頌德記念館建設ノ由來及工事經過報告　濱崎部長
一、從業員總代故翁銅像ニ挨拶　菅原所長
一、同　鑛夫代表
一、挨拶　淺野社長
一、來賓祝辭
一、來賓及一般來會者ニ挨拶　前川專務
一、礦山歌合唱　一同
一、閉式ノ辭　菅原所長
正午終了　晝餐
午後零時半ヨリ
一、故翁讃稱御詠歌　大內民惠
歌詞說明　遍照講員
合唱
一、故翁活動寫眞映寫
一、能狂言　東京也留舞會同人
一、相撲　從業員
夜
一、講演　伊藤南州
一、活動寫眞映寫
以上

開館式參列者

役付鑛夫及職員

昭和三年度社宅世話役	三六
同　四年度同	四一
同　五年度同	五一
同　六年度同	五五
同　七年度同	五五
同　八年度同	六〇
青年會幹事長以上	二二
溫友會正副會長	二
修養團幹事	四
親和會支部長	四
當日小使	一二
職員	二六〇
計	五九二
來賓	
五圓以上ノ寄附者	一六六
特別招待者	一一一
重役及本社課長以上	一四
主任以上	一七
新聞記者	一三
計	三二一
總計	九一三

清祓式

開館式擧行に先立ち、昨六日館內ホールに於て、前川專務河合監査役菅原所長以下重なる役員關係者等參列。佐波古神官によつて嚴肅なる工事竣工清祓式を擧行した。

故翁讃稱の御詠歌

大內民惠

大隈侯は、我淺野翁を評して、實業界の第一人者にして、一奇傑、山なれば妙義、川なれば玖磨奇巖怪石、妙趣に富み、流水飛瀑して、珠玉を飛はすに似たりといひ、蘇峯學人は、非凡なる脫線的人物といひ、高橋是清翁は、達磨に彷彿たる淺野君といつた。而して我磐炭四千の從業員は、慈父と仰ぎ親方と慕つた。今や其人逝いて四年、今月今日、常磐線綴驛頭に、巍然たる其

頌德紀念館は工事全く竣えて開館式を擧行せらるゝに到つた。洵に欣快に堪へない次第である。さて我村には、老少男女九十余名を其講員とする遍照講と稱する、佛敎信者の團体がある。此一大偉人を頌表し、記念する未曾有の盛儀を擧ぐるにあたり、御詠歌を以て、我等の至誠を合唱し、其德を讃稱したいから、然るべき歌を作つてもらひたいと、いふ事を記者の處に持ち込んだのは丁度昨年十一月九日、翁の三回忌當日であつた。記者は其奇しき因緣に驚き、且つ喜び、靈前にぬかづきて、燒香謹詠したのが、此功院殿（翁の法號）讃稱御詠歌三首なのである。而して此積由を濱崎部長に申出て、直ちに其快諾を得た事は、講員一同の大に感喜した事であつた。爾來數ヶ月間、諸氏は熱心なる練習を積みて本日こゝに館內の銅像前に、合唱する事になつたのである。こゝに於て記者は、自畫自讃の嫌ひなきにしも非ずであるが、詠者の責任として、其大意を解釋し說明すべきであると思はるゝので、聊か其を試みやうと思ふ。されどもとより記者は、歌人でもなければ、斯道の專門家でもないのであるから、土塞歌その物が、なつて居ないと云ふ事丈は、豫め御含みを願ひたいのである。先つ第

一番の歌の、鍬並の里といふのは、翁の出生地で富山縣水見郡鍬田村地方の、往昔の地名であ

積功院殿讃稱御詠歌

大內民惠謹詠
遍照講內郷支部員合唱

第一番
鍬並の里に巢立ちし熊鷹の羽風に向ふ鳥なかりけり

第二番
竹の皮揃へし手もて我國の寶の庫も開きけるかな

第三番
世の中は稼ぐにおひつく貧乏なし努力は我の命なりけり

る。熊鷹といふのは、翁の祖先富山藩の重臣であつた、淺野大夫氏共が、元祿初期の頃、榮職を捨てゝ、前記鍬田の光福寺に身を寄せ佛門に歸依した時に、身に着けて居つた紋服の紋が、丸に鷹の羽であり、翁が明治六年、二十六歳にして、横濱に店舗を開いた時の假名が、大熊良三であつた處から、鳥中の雄、熊鷹を以て、翁に例へたのである。（淺野總一郎傳參照）さて其大意は、鍬並の里に巢立つた熊鷹は、やがて大空に飛翔するに到るや、其雄勁なる羽風羽振に向つて、及ぶもの、敵翁が海邊のするものが無つたといふ有樣で、餘村鍬田に生れて、大日本を舞臺として、活動振り、成功振りは實業界其人多しと雖も、之と覇を爭ふ者は無かつた、といふ意を、寓したのである。第

一番の歌の、竹の皮は簿である。翁は明治四年、横濱で竹の皮商をはじめ、田舍から買ひ出したものを、揃へて賣り歩いた事は餘りにも有名な話である。其大意は、往年竹の皮を揃へた、其手を以て、奮勵努力やがては大實業家となつて、石炭、セメント、電氣製鐵造船航海貿易等々と、二十有余の會社（資本總額約三億圓）の社長として、我日本の寶庫を開いたといふ意である。第

二番の歌は、翁一生の一大信條を、其まゝ現はしたもので、讀んで字の通りで、全山一般の、人口に膾炙するところで、說明を要する迄もないのである。

要するに第一は翁一代を概觀し、第二は翁一代の事業を一括して現はし、第三は翁一生の信條として、實行實現したる事を歌つたものである。即ち三首九十四字を以て大隈侯の所謂實業界の第一人者を讃稱したる積りなのであるが、果してどうかは、各位の御批判に任する事とする。

終りに一言して置くが、御詠歌の緣起惡い樣な考を持たれたり、乞食などが門に立つて歌ふものでもあるかの樣に、誤解して居らるゝ仁も少くない樣であるが、耶蘇敎の讃美歌と同樣、我國佛敎の一派に於ても、古くから冠婚葬祭何れの場合に於ても、其に相當する御詠歌を合唱する事になつて居つて一意專念愛りなき明鏡の如き心境にあつて、之を詠唱する處に信仰の要諦があるといつて、今や全國を風靡しつゝある狀態なのである

內郷村報の六大使命

一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。
二、村內公私各機關の活動狀況を報導し併せて其協調を計り、總親和總努力の實現を期す。
三、本村共濟事業の徹底を期す。
四、村內の善事美行を表彰し、且之を奬勵す。
五、本村と本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
六、餘力を以て、國民善導に當る。

本紙發行は大內一家の事業にして、其の社說は子孫に對する遺言を兼ぬるものなり。

願ひいたしますよ」と、いとも如才なく、打ちとけての仰せ、一見舊知の如しといふが、一揖よく老接す[illegible]機會屢々にして、又其恩顧を蒙る事も、愈々深きを加へたのである。翁が現場に、將に會合に、其[illegible]十余人の從業員が、期せずして、一致醵金して羽蒲團を作り、熱誠をこめて一々署名したる一大簿冊を綴り

昭和五年八月第三種郵便物認可

內郷村報の誌徳記念號

毎月一回一日發行

本紙定價一部金五錢一ヶ年郵稅共金四十八錢
發行所　福島縣石城郡內郷村宮字宮添二
編輯發行兼印刷人　右全所　振替仙臺八四二〇　內郷村報社
印刷所　福島縣石城郡平町一丁目二九　株式會社平活版所　大內民惠